

第拾七回記念祭歌

赤椿作曲

ハ ク ロ カ タ マ ハ キ ヨ ー ク シ テ

イ マ ト ダ イ ノ ア キ フ カ シ

キ ホ ニ モ ユ ル ワ カ ヨ ト ノ

テ シ ホ ハ イ マ シ タ カ ナ リ ヌ

セ イ キ ニ ミ テ ル リ ガ ト モ ノ

ヒ ト ミ ハ イ マ シ カ ガ ヤ キ ヌ

第十七回記念祭歌

(小笠原房穂作)

(一) 白露が球は清くして 今筒臺の秋ふかし 希望に燃ゆる若人の
血汐は今も高鳴りぬ 生氣にみてるわが友の 瞳は今しががやきぬ

(二) それ筒臺は神境ぞ 敬虔ふかき學園ぞ 警醒の聲のひびくとき
誰かは眠るこの丘に 黎明の光り見ゆるとき 誰かは歎すわが丘に

(三) 混亂の世をひくく見て われらが意氣はいや高し 見よや一千の若人が
自由と眞摯の記念祭 祝へやうたへ友よいざ 今日筒臺の記念祭

第拾九回記念祭歌

貞生作曲



第十九回記念祭歌

(操夢郎作歌)

(一)

秋 清 澄 の 氣 を 受 け て、 眞 摯 の 色 に 匂 ひ て は、
姿 け だ か き 白 菊 の、 筒 臺 讃 美 の 香 り あ り。

(二)

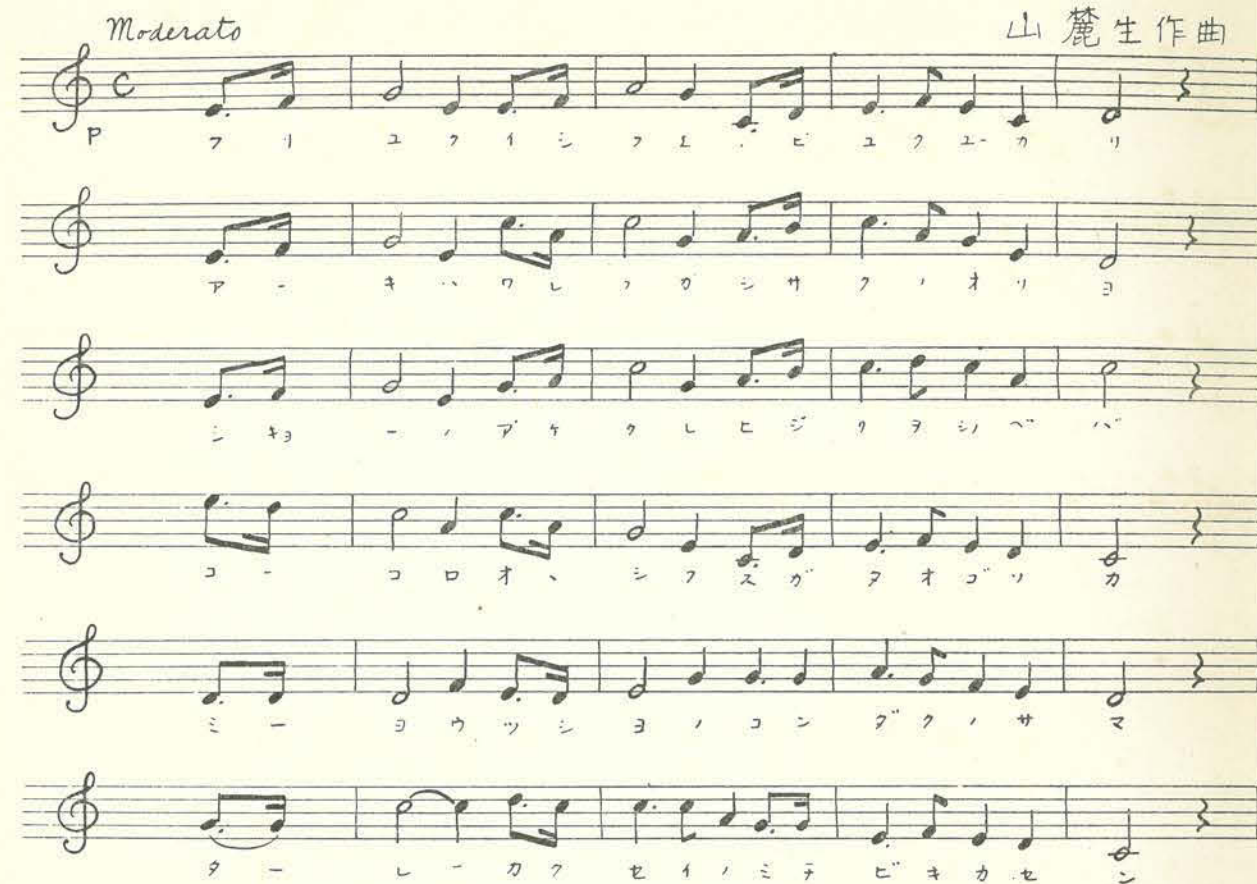
今 世 を あ け て 理 を 失 し、 虚 像 の 影 に 超 る 時、
見 る 現 實 に 根 ざ し て は、 經 論 高 き 吾 が 理 想。

(三)

渾 沌 の 世 よ 諸 人 よ、 仰 げ 筒 臺 上 遠 々、
啓 示 の 光 あ る 所、 き ら め く 星 の 一 群 を

第拾八回記念祭歌

山麓生作曲



第十八回記念祭歌

(哀愛生氏作)

(一)

古 り ゆ く 礎 石 伸 び ゆ く ユー カ リ、 秋 は 我 等 が 思 案 の を り よ、 詩 郷 の あ け ら れ 聖 者 を 偲 べ ば、
心 雄 々 し く 姿 お こ そ か、 視 よ う つ し 世 の 潤 濁 の ま ま、 誰 れ 覺 醒 の 導 き か せ む。

(二)

滾 々 と 流 れ 盡 き せ ら れ 學 泉 に、 立 寄 り 汲 む や 先 進 後 輩、 春 花 秋 葉 め ぐ る と 見 る 間 に、
今 黎 明 の 鐘 こ そ ひ ま け、 爾 が 使 命 の 重 き を 悟 り て、 國 と 人 と の 道 急 げ よ や。

(三)

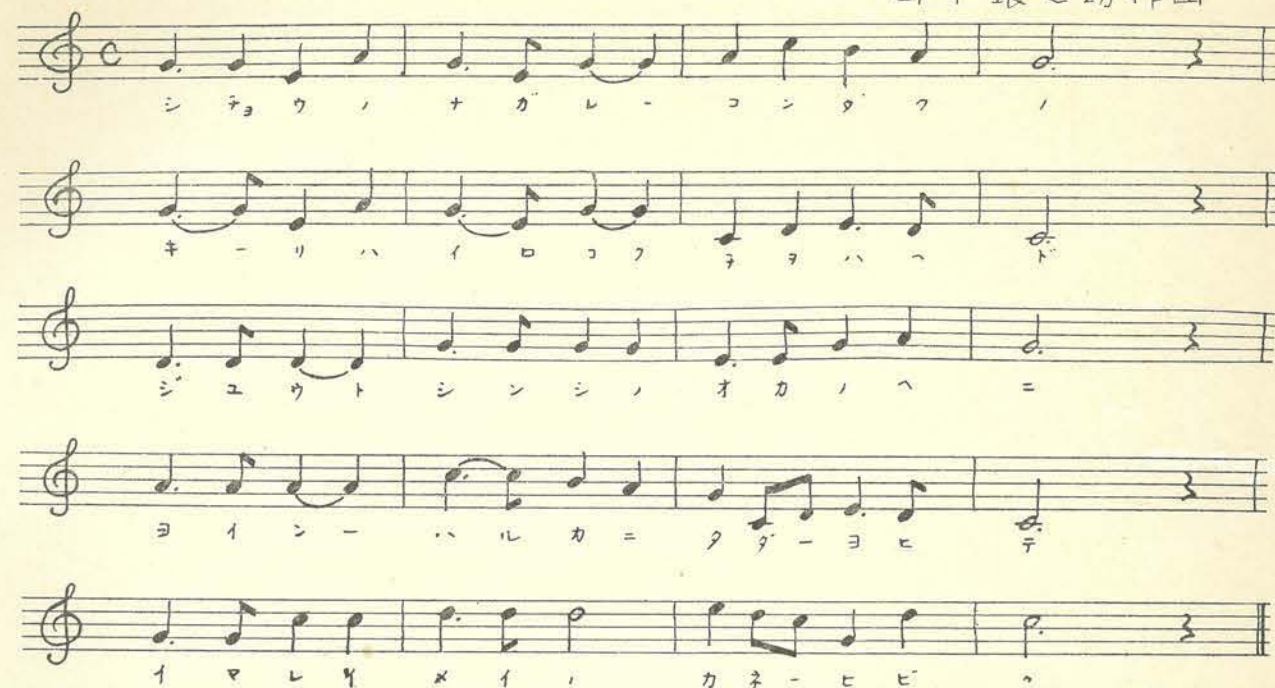
透 徹 の 氣 に よ く 浸 り て こ そ、 學 と 徳 と は く ま る な れ、 い さ 準 備 終 へ 塵 の 巷 へ、
體 験 こ そ は 眞 の 力 よ、 筒 井 が 里 に 駒 嘶 い て、 菊 が なる 時 わ が 意 氣 高 し、



志大肉題

第二十回記念祭歌

田中銀之助作曲



第二十回記念祭歌

糟谷武美作歌

(一)

思潮の流れ混濁の

霧は色濃く地を這へど

自由と真摯の丘の上に

餘韻はるかにたゞよひて

今黎明の鐘ひびく

(二)

傳統竝に二十年

商業大學築かれつ

文化花咲く殿堂の

大氣いみじくふるはせて

今黎明の鐘ひびく

(三)

筒臺千餘の若人^{ワカウデ}が

禮讃のうたゆゑしくも

のぼる理想の太陽に

晨の天地ゆるがせて

今黎明の鐘ひびく